

# 楓之典君乳母草子

（日々是猫日） 其ノ玖

## 猫の妙術

中條 恵子 陸自85

「我知言。我善養吾浩然之氣」

「敢問、何謂浩然之氣」

「難言也。其爲氣也。至大至剛、

以直養而無害、則塞于天地之間。其

爲氣也、配義與道。無是餒也。是集

義所生者、非義襲而取之也。行有不

慊於心則餒矣。」

（孟子）「私は（他者の）言葉の真意をよく理解する。私は己の浩然の氣をよく養っている」

（公孫丑）「あえてお伺いします。浩然の氣とは何でしようか」

（孟子）「曰く、「言葉にするのは難しいが、その気は、至大にして至剛、正しく養い、損なわなければ、天地の間を塞ぐ。その気は、義と道とに配されているものであり、これらがなれば、飢えてしまう。この気は積み重ねた義によつて自然に生ずるもので、義が外から取り込むというものではない。人が何かをなすに当

たり、心に疚しいことがあれば、たちまち飢えてしまう」

それでは、古猫殿の妙術をご紹介いたしましょう。

● 古猫殿、難無く鼠を捉まる

● 鹿重ねて妖かしの猫又となる猫様

の話は、徒然草に記されて以降各地に数多あります。

が、お江戸には、武士の嗜みたる儒家・道家の教えを体現し、剣術の真髓ひいては人生の奥義を教示した古老的の猫様がおられました。

## ○ 猫の妙術

『猫の妙術』は、江戸時代前中期の下総関宿藩士・佚齋樗山（1659-1741年 本名・丹羽十郎

右衛門忠明）著『田舎莊子』（享保12年（1727年）の一話です。

猫達と古猫の問答で、剣術の技・氣・心のあり方を説き、「事理一致」もなれば、敵は生じず、周囲にも現れない締めくくります。

● 主の剣術も通じず

主の勝軒は、腹を立てて自ら木刀

を持出し、鼠を打ち殺そと追い回しましたが、鼠は手元から抜け出

て、木刀に当たりません。そこそこ

も取り拉ごうと爪を研いでおりまし

たところ、未だこのよくな強い鼠が道に修練し、鼠ばかりか馳や獣まで

いることを存じませんでした。御身は、いかなる術を以て容易くあの鼠を服従させられたのでしょうか。何卒、惜しみことなく貴公の妙術をご教示

● 大鼠出現。猫達太刀打ちでさす勝軒という剣術者がおりました。その家に大鼠が出て、白昼に座敷を駆け回ります。主の勝軒はその部屋

を閉て切り、手銅いの猫に鼠を捕らせよういたします。ところが、この鼠は前に出でて、猫の顔に飛び掛

かって食らい付いたので、猫は鳴き声をあげて逃げ去つてしまいまし

た。これは手に負えないと、近在で鼠取りの名手と呼ばれる猫たちを借り集め、かの部屋に追い入れたのです

が、鼠は床の隅にじつとしていて、

猫が来れば飛び掛かりて食い付き、

その殺気がすさまじく見えたれば、

猫達は皆尻込みして動きません。

● 猫の衆、古猫殿に教えを乞つて参りました。

その夜、鼠を取り損なつた猫どもは鼠取りの名手と呼ばれ、その

が勝軒の家に集まつて、かの古猫を

上座に招き、いざれも跪いて、「私どもは鼠取りの名手と呼ばれ、その

● 猫の衆、古猫殿に教えを乞つて参りました。

その夜、鼠を取り損なつた猫どもは鼠取りの名手と呼ばれ、その

が勝軒の家に集まつて、かの古猫を

上座に招き、いざれも跪いて、「私

どもは鼠取りの名手と呼ばれ、その

道に修練し、鼠ばかりか馳や獣まで

いることを存じませんでした。御身

は、いかなる術を以て容易くあの鼠

を服従させられたのでしょうか。何卒、

惜しみことなく貴公の妙術をご教示

下され」と、謹んで申します。

古猫は笑つて言います。「いざれ

ばかりの勢いあります。

● 古猫殿、難無く鼠を捉まる

● 古猫殿の妙術

もお若き猫の衆、懸命にお働きなさ

れたが、未だ正しい鼠取りの法をお聞きになつておらぬが故に、想定外のことにつれて不覚を取られた。し

かしながら、まずは各々の方の修業のほどをお伺いいたそ」と。

● 黒猫、技のみにて理を知らず  
中から、機敏そうな黒猫が一匹進

「私は代々鼠取りの家に生まれ、その道に心がけましたので、七尺の屏風を飛び越え、小さき穴もくぐり、子猫の頃より、早業・軽業でできな

いということがありませぬ。ある時は寝たふりをし、またある時は不意

をつき、家の梁・桁を走る鼠であ

うとも取り損じたことはございませ

ん。しかれども、今日は思いも寄ら

ぬ強い鼠に出会い、一生の後れを取

り、心外の至りにござります」と申

します。

古猫が言うことには、

「ああ、お主が修めたのは、技法のみ。それ故に、未だ狙う欲心があることから免れられぬのだ。先人が

技法を教えたのは、欲心から自由になれる道筋を知らしめんがため。よつ

て、その技法といふものは、単純で容易く、その中に究極の理りを含ん

でいるのだ。

後世、技法を専らとして、どうかすると、色々なことをこしらえ技巧を極め、先人を軽んじて機知を用い、

果ては技法比べということとなり、その技巧も尽きて如何ともしがた

つまらぬ者が技法を極め、機知を専らとするなど、皆かくのごとしで

ある。技法は心の作用なりといえども、正しい道に基づかずただ技巧を専らとするばかりでは偽りの道に陥る端緒となり、かような機知は却つて害になることが多い。これをもつて反省し、よくよく工夫すべきであ

る」

● 虎猫の気、豁達至剛なるも浩然の気にあらず

また、虎毛の大猫が一匹まかり出て、こう申しました。

「私が思ひますに、武術は気のありようを尊びます。故に、私は久しく氣を鍊成して参りました。今や

その氣は豁達至剛にして、天地に満ちるがごとし。

氣によりて敵を脚下に踏みつけ、

ます勝ちを取りて、その後に捕らえます。声に従い、響きに応じて、

鼠が左右どちらにいようともその変

化に応じられないことはござらぬ。

技法に心を用いなければ、技は自ずから湧き出するもの。梁・桁を走る鼠は、にらみ落としてこれを捕りま

する。

しかるに、かの強鼠は、来るに気配なく、往くにも跡を残さず離れま

す。これはどうしたことでありま

すが、古猫が言つことには、

「お主が修練したのは、氣の勢いに乗じて、働くもの。それは自らの

自信を頼みとしなければ成り立た

ず、最善のものにあらず。我が敵の

氣を撃ち破つていこうとすれば、敵

もまた破ろうとする。また、破ろう

にも破れない者がある時は如何とす

る。我が敵の氣を覆つて挫かんとする。孟子が言う浩然の氣に似ている

ようにも覆えない者があるときは如何。

どうして、我のみが強く敵はみな弱い、などということがあろうか。

豁達至剛にして天地に満ちるよう

に思えるのは、皆、氣のかたちであ

る。孟子が言う浩然の氣に似ている

ようで、実は全く異なるもの。浩然の氣は、道理を載して剛健なのだ。

お主のは、勢いに乗じて剛健そうに見えるだけ。故に、その働きもまた

同じではない。滔々と流れる大河の勢いと一夜限りの洪水の勢いのごとし。その氣勢に屈しない者があれば如何にする。

窮鼠却つて猫を噛むということがある。それは必死に迫つて己を頼みにすることがない。命を忘れ、欲を忘れ、勝負をも思わず、その身を全うしようという心もない。故に、そ

の意志たるや金鉄のごとし。かよう

な者を、どうして氣の勢いで破ることができようか

――以下次号――

○ 楓之典君のつぶやき  
――先々代ちやら爺殿は、齡経で人語を一節発し、猫神様の下へ修行に旅立たれた逸物也――

歌川国芳『猫の妙術』・東京都中央図書館所蔵

